

邦楽器の持続可能性に必要な視点とは¹

京都女子大学教授
前崎 信也

三味線・琴をとりまく現状

邦楽器は歌舞伎や文楽、日本舞踊など多くの無形文化財に欠かすことのできない道具であるが、生産数は昭和の半ばから減少を続けている。例えば 1970 年に年間 18,000 丁あった三味線の生産数は 2017 年には 3,400 丁に、箏も同様に 25,800 面から 3,900 面まで減少したとされる²。更に、2019 年からの新型コロナウイルスの流行により、芸能分野では公演中止が相次いだことで、すでに高齢化が問題となっていた生産者の廃業や演奏家の引退が増加した。

時を同じくして、2020 年に業界最大手の三味線メーカーである東京和楽器が倒産の危機に陥ったことが広く報道された³。邦楽器業界の苦境がようやく社会的に認知されることとなり、2022 年に「東京三味線」と「東京琴」が経済産業大臣から伝統的工芸品に指定されるに至る。これで国から伝統的工芸品に指定された楽器は「福山琴」「三線」に加えて 4 品目となった。

生産数が 1970 年代にピークを迎え、その後減少を続けていることや、職人の高齢化、材料や道具の枯渇といえば、著者が専門とする伝統工芸の分野で長年議論されてきた課題である。近年新たに 2 品目が国の伝統的工芸品に指定されたことで、楽器の現状についても調査を行ってきた。その結果見えてきたのは邦楽器業界が抱える課題の難しさである。以下では、特に重要な課題である市場と素材の観点から見てみたい。

変わることが許されない楽器という工芸品

上述の経済産業省が指定する伝統的工芸品の指定基準とは①主として日常生活の用に供されるもの、②その製造過程の主要部分が手工業的であるもの、③伝統的な技術又は技法により製造されるもの、④伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるもの、⑤一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているもの、とされている。この基準によれば、日常生活の用に供される限りは、どのような製品を製造すべきかという明確な決まりをもつ品目は少ない。つまり、伝統的な工芸品を現代の生活習慣に合わせた製品につくりかえることについての制限は緩く、新製品や新素材の開発については補助金の対象となることもある。実際に、多くの伝統的工芸品の産地では常に新しい素材や技術・デザインを導入し、より社会や市場の受容に即した製品開発が行われているのが実情である。

この視点で検討すると、邦楽器の 4 品目は現代社会の変化に合わせて変化することが難しいという、全体で見ると少数派の品目に含まれる。楽器は各種の無形文化財を支える道具として、伝統的に守られてきた音を奏で続けることが至上命題である。そのため基本的に音に関わる部分の形態や素材を変化させることは忌避される。これが意味することは、楽器を現代化するハードルが極めて高く、「演奏者を増加させる」以外に邦楽器産業復活の方法がないということである。国の邦楽器への支援の在り方も、この考え方に即してきた。邦楽器は文部科学省が管轄する無形文化財の道具であり、伝統芸能などの振興・保全という意味での舞台や演奏会の支援、もしくは教育現場における日本文化としての普及が主なものとなっている。一方、この枠組みの中では楽器製造業への直接的な支援は容易ではない。

2022 年の「東京三味線」と「東京琴」の伝統的工芸品への指定は、経済産業省が国内最大市場である東京の邦楽器製造業を支援できる仕組みを作ったという意味で画期的なものと言える。しかしこれは、邦楽器を取り巻く状況がそれほど逼迫しているということの表れでもある。更に述べれば、琴や三味線よりも生産数が少ない楽器については、需要という意味でも国や自治体のサポートという意味でもこれまで以上に厳しい未来がすぐそこに来ている。

伝統的素材の持続可能性

伝統的に楽器に使用されてきた素材は特殊なものが多い。これも良い音を奏でるために長年蓄積されてきた経験則に裏付けられたものである。ここでは邦楽器の中でも著者が関わってきた三味線を取り上げる。三味線は邦楽器でありながら、絹絃を除く素材が伝統的に輸入品を使用していることが特徴であり、その素材の輸入が年々困難になりつつある。

木部は主に 3 種類の木材（紅木・紫檀・花梨）が使用されている。天神や棹に使用される紅木はインド産が中心であり、ワシントン条約に指定され国際取引に規制がある。現状は過去に輸入された在庫を使用しており、生産数の減少を鑑みれば当分の在庫は確保されているようだが、次に輸入の必要が生じたときにそれが可能かどうかは不明である。糸巻に使用される象牙、撥に使われる象牙・鼈甲はどちらもワシントン条約で国際取引が禁止されている。これも国内に十分な在庫があるとされているが、倫理的な観点から近い将来に象牙・鼈甲の使用の継続が困難になることも考えられる。胴に使用する皮も海外からの輸入頼りであり猫・犬・カンガルーなどの皮が使用されている。動物愛護の観点から年々使用が困難となっており、近い将来に代替素材が必要となる可能性がある。

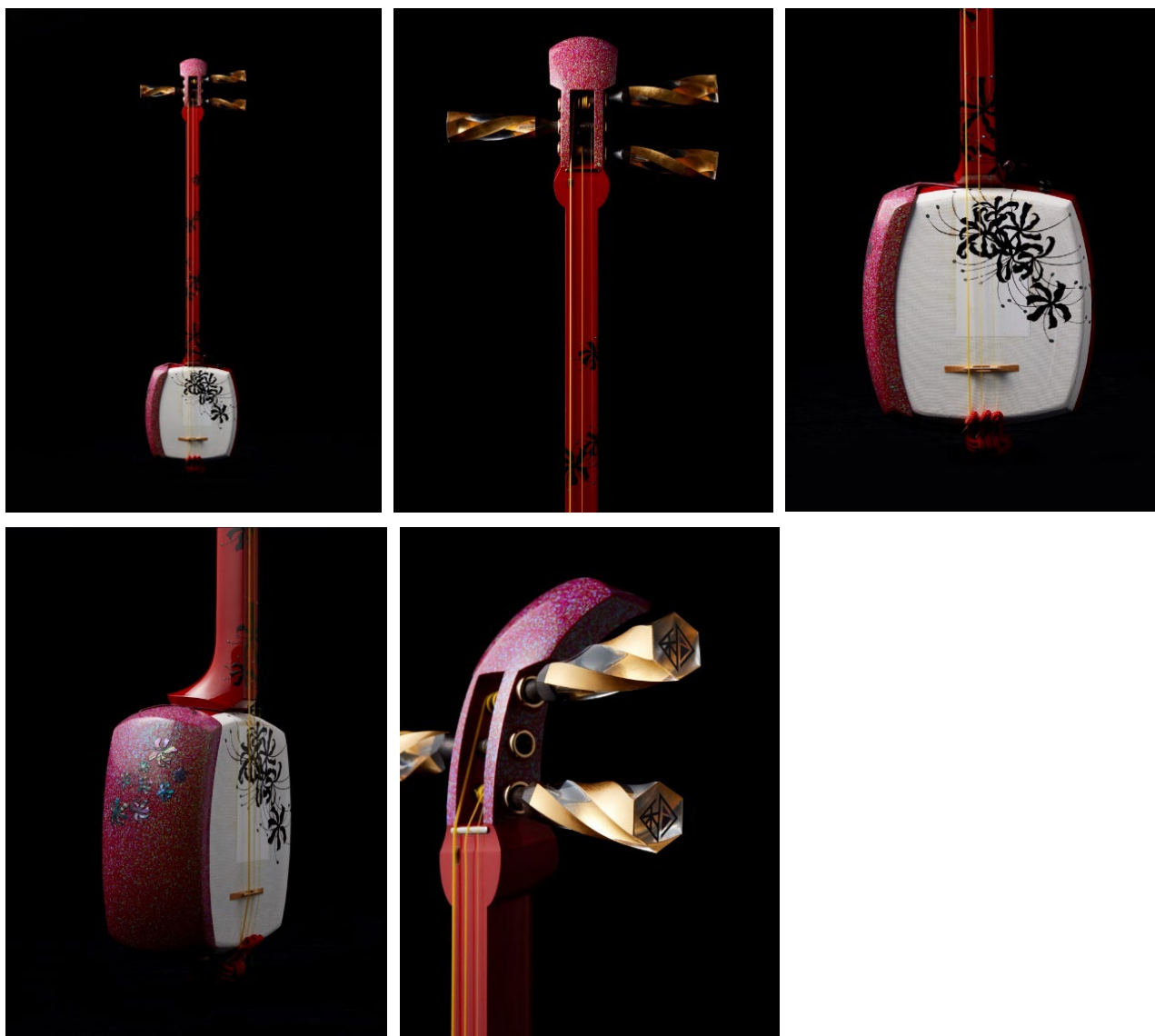
伝統的な素材を使い続けることに固執すれば、これらの素材の国内在庫がひとつでも枯渇し、輸入が不可能となったタイミングで日本の三味線製造は停止してしまう。さらに動物由来の素材の使用をいつまで継続すべきなのかという議論も避けて通ることができなくなるだろう。

若者の憧れを喚起する邦楽器とは

このような課題を知り、京都女子大学前崎研究室では、2021 年から KOGEI Next プロジェクトの一環として三味線プロジェクトを開始した。KOGEI Next とは自然環境や社会課題との関わりを通じて工芸の次の姿を提案・実現させようとする運動であり、京都女子大学前崎研究室は同プロジェクトのパートナーである⁴。津軽三味線プロジェクトは伝統文化としての邦楽とその楽器、そして漆芸の技術を未

来に伝えたいという学生の提案から始まった。演奏者を増やすためには三味線に興味をもつ若者が増えることが大切であり、そのためにはこれまでにないデザインの三味線を有名音楽アーティストが演奏することが必要という大学生の思いから始まった。

本プロジェクトには詩吟、邦楽器とロックバンドを融合させた和楽器バンドで津軽三味線を担当する京都出身の蜷川べに氏にご協力いただけることとなった。プロジェクトで制作した津軽三味線《Lycoris》のデザインは蜷川氏と学生がミーティングを重ね、共創して実現した。学生が提案したデザインコンセプトは演奏者となる「蜷川べにさんのイメージ×べにさんの“好き”」とし、実際のデザインを担当したのは田畑絵梨奈（棹・胴表の彼岸花）と高原木綿（胴裏のキバタン）である。



Photo：中河原理英

提供：ユニバーサル・ミュージック

使用したのは棹に紅木を使用した三味線かとう（東京都荒川区）の「エレクトリック三味線 夢絃 21」である。制作に使用した素材は楽器としての機能に支障を与えない範囲で環境に配慮したものを可能な

限り使用することとした。外装の装飾については、若宮隆志氏を代表とする漆芸職人集団・彦十時絵（石川県輪島市、現在は金沢市）が伝統的な漆芸技術を用いた。

まず蜷川氏のイメージカラーである朱色の漆を三味線の本部全体に施した。三味線全体に塗られている朱漆は、蜷川氏が京都出身ということもあり、採用したのは堤浅吉漆店（京都市下京区）の漆である。天神には京セラ株式会社が独自の宝石合成技術によって開発した人工宝石である京都オパールを使用。貝殻を原料とする螺鈿は年々入手が困難となっており、代替素材として注目されている素材である。京都オパールは硬く、そのままでは曲面に貼ることができないため、薄い板状の京都オパールを砕き、漆を使って天神と胴掛の表面に敷きつめた。

糸巻は樹脂製の透明のものを採用し、和楽器バンドのロゴを漆で描いた。側面には KOGEI Next が普及を進める「都市鉱山プロジェクト」の金箔を使用。これは廃棄される PC や携帯電話などの小型家電からリサイクルされたものである。KOGEI Next に参加しているアーティストがプロジェクトで使用する金と銀については、全てこの「都市鉱山」由来のものを使用することを基本としている。

棹と胴に黒漆で描かれた彼岸花は蜷川氏のタトゥーをイメージした。シンプルな彼岸花が棹まで流れるように描き、彼岸花のシベの先には螺旋が施されている。胴には犬や猫の皮を使用するのが通常だが、動物の皮は湿気に弱い。漆は、室（むろ）という湿度が保たれた箱に入れて硬化させなければいけないことや動物保護の点から、本プロジェクトでは湿気に耐えられる三味線用の合成皮革リプルを使用した。樹脂製の胴裏面は白漆を塗り、蜷川氏の好きな鳥であるキバタンを都市鉱山由来の金箔で表現。胴掛けには、天神と同様に全体に京都オパールを敷きつめ、その上から螺鈿で和楽器バンドの 8 人のメンバーを表す 8 つの彼岸花を 8 の字に配置した。さらに胴内部には、NFT 化した本作品の画像と紐づけられた NFC タグを貼付。スマートフォンをかざすと NFT 化した情報としての三味線の画像と本プロジェクトの詳細が表示される。《Lycoris》のメイキング動画は KOGEI Next の YouTube ページで配信されている⁵。

完成した《Lycoris》は 2022 年 11 月 19 日に、東京の六本木ヒルズカフェで開催された KOGEI Next 展で蜷川氏によって演奏された。同年 11 月 25 日の「和楽器バンド TOUR2022 ボカロ三味 2 大演奏会」の仙台公演にてライブで初使用された。以後、蜷川氏のシグネチャーモデルとして日常的に演奏に使用されている。また、蜷川氏と和楽器バンドの町屋氏による共作の楽曲「Lycoris」が YouTube で配信されている⁶。

実際に演奏に使用されていることから、伝統的な漆芸技術を使って装飾されたこの津軽三味線が楽器としての機能を保持していることは明らかである。また、演奏者である蜷川氏から繰り返しこの三味線は「音が良い」との評価をいただいている。これは棹と胴を朱漆でコーティングしたことで本部全体が硬化し、響きが良くなったことが原因ではないかと考えられている。邦楽器の音と漆の関係については今後も検証を続けていきたい。

おわりに

三味線に限らず、邦楽器に使用されている素材の多くは、世界的な自然保護や動物愛護の流れの中、持続可能とは言えない状況にある。使用不可になる素材があると分かっているのであれば、継続的な供給が見込める素材を使用して大切な「音」を維持するという視点は必要だろう。同時に邦楽器の制作や

販売に携わる人々が今後も事業を継続していくためには、演奏者数の減少を食い止める必要がある。そのためには若い人々が「演奏してみたい」と思う工夫が求められる。そのひとつとして、本プロジェクトでは、学生が蜷川氏と共にデザインし、伝統的な漆芸技術と人工皮や京都オパール、都市鉱山由来の金箔など、環境に配慮した素材の融合に挑戦した。

また、この津軽三味線《Lycoris》の制作をきっかけに全国邦楽器組合連合会との関係の構築ができた。2024 年春からは和楽器プロジェクトの第 2 弾となる三線プロジェクトを、沖縄県三線製作事業協同組合をはじめとする複数の事業者・団体と進めている⁷。この「そこにあるべきではない三線」プロジェクトでは、沖縄の海で問題となっているサンゴ礁の白化について警鐘を鳴らすために、装飾に白化サンゴを使用した三線を制作する。制作費用の一部はクラウドファンディングで募集した⁸。三線の胴(チーガ)に使用するへび皮を沖縄の藍で染め、モクマオウの棹(ソー)に漆を塗ることで響きが良くなるかを試すなど、過去に例のない三線を目標に様々な試みに挑戦している。

完成した三線はプロジェクトのスペシャル・サポーターである沖縄出身のバンド HY が主催し 2025 年 3 月に沖縄で開催される HY SKY Fes の前夜祭(沖縄県総合運動公園)で披露される予定である。それ以降も、サンゴ礁生態系、そして沖縄の伝統楽器である三線が危機的状況にあることを警鐘する目的に使用することを計画している。

参考・引用文献

- ¹ 本文は 2022 年 8 月に開催された意匠学会第 65 回大会での研究発表「津軽三味線と漆芸の融合 —KOGEI Next 監修 エレキ三味線《Lycoris》—」及び、作品展示「和楽器の持続可能性 —KOGEI Next 監修エレキ三味線《Lycoris》の制作を通して—」の内容を元に新しい情報を加えて再編集したものである。
- ² 公益財団法人京都市芸術文化協会『令和 7 年度「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」委託業務 調査報告』2020 年、公益財団法人京都市芸術文化協会、p2
- ³ 「日本文化の危機、三味線の最大手「東京和楽器」が廃業へ」『東京新聞』2020 年 6 月 28 日
- ⁴ 詳細については KOGEI Next の HP を参照 (URL: <https://kogei-next.jp/>)
- ⁵ URL : <https://youtu.be/oKg9ye2ZbKs>
- ⁶ URL : <https://youtu.be/hlkCZPtOwU>
- ⁷ 「沖縄の「サンゴ白化問題」アピールへ「三線」作り 京都女子大学生がプロジェクト参加」『京都新聞』2024 年 9 月 13 日。
- ⁸ クラウドファンディングサイト (URL: <https://readyfor.jp/projects/wanohibiki-sanshin>)。